

刀兼房

永祿

「兼房」「兼房作」「兼房造」

大永三年(一五二二)七月に没した

善行兼房の子の四男が初銘を

兼房と切つて、三男は石見

守國房、次男は河内守清房、三

男は若狭守氏房、四男は助房と

佐に改銘をする。他に若狭守氏

房門人で濃州長村住。他に清十

郎兼房、助房の弟で三州吉田

住兼房がいる。さらに「兼州神戶住

兼房」元龜、濃州内善長兼房作」

天正、兼房「信濃天正、兼房」向

本國美濃尾張永祿、尾州大少住兼房」

平成二十七年七月十七日

鑑定刀

刃長 31.2cm (二尺三寸四分九釐)

元重 0.60cm (0.58cm)

茎中 2.70cm 茎先 1.39cm

切先長 3.20cm 茎長 20.2cm (20.6cm)

元中 3.40cm (3.60cm)

先中 2.12cm (2.11cm)

反り 1.45cm (4.8mm)

先重 0.41cm (0.39cm)

切先重 0.27cm (0.26cm)

茎重 0.44cm (0.40cm)

元重 0.45cm (0.45cm)

先重 0.45cm (0.45cm)

元重 0.45cm (0.45cm)

先重 0.45cm (0.45cm)

元重 0.45cm (0.45cm)

先重 0.45cm (0.45cm)

元重 0.45cm (0.45cm)

先重 0.45cm (0.45cm)

元重 0.45cm (0.45cm)

先重 0.45cm (0.45cm)

元重 0.45cm (0.45cm)

先重 0.45cm (0.45cm)

元重 0.45cm (0.45cm)

先重 0.45cm (0.45cm)

元重 0.45cm (0.45cm)

先重 0.45cm (0.45cm)


元重 0.45cm (0.45cm)

先重 0.45cm (0.45cm)

元重 0.45cm (0.45cm)

先重 0.45cm (0.45cm)

元重 0.45cm (0.45cm)

彫刻 表裏に棒樋を茎先まで控まとうし、赤樋を極く。
 茎はおよそ1.5cm程区を送る。長寸で鑄は低く先は葉尻、刃前口は棟所「棟所」
 鑄は鷹ノ羽、目釘元は二、下の元は給理、銘は目釘元の下からやや少く五味をもった
 書体で三字銘を切る。明るく刃先に口口に、鍛えの長、短、地鉄、送々とした姿は健全で折古境の美濃物特有の鋭利さか
 よく表われた一振り。

切先は中切先が延びかけんでフクラはやや枯れ、反りは中間反りが式めて先反りを加えた永祿・元龜・天正の刀姿となる。
 地鉄は小板目に小室、板目を交じえてやや肌立ち、細かな地番が厚くつみ、手元は淡く焼出し映りが表わぬ地景は細かく
 肌に添って沈む。鉄色は青黒く潤いがあり、明るく刃入る。
 刃文は尖り互の目、所々茎中をなめ、刃中は足、葉よく入り金筋・砂流しを交じえる。互の目は五味を帯び兼房れれ七
 交じる。匂口は明るく刃入る。
 樽子 木刃と同様に乱水、先は丸く返り、裏の先は沈む。



刀研究

刀 備州住長船五郎左衛門尉清光作

天文八年八月吉日(一五三九)

備前 天文

「備前国住長船五郎左衛門尉清光」

「備前国住長船五郎左衛門尉藤原清光」

永正の五郎左衛門尉清光の子とも

同人とも、ウ。

永祿までの作がある。

清光のなかでは一番の上り。

業切。

平成二十七年七月十七日 鑑定刀

母長 68.2cm (二尺二寸五分)

元重 9.20cm (9.75cm)

茎重 2.83cm 茎先中 3.7cm

切先長 3.43cm (3.9cm)

元中 3.44cm (2.78cm)

先中 2.09cm (1.99cm)

茎反り わずか

反り 2.48cm (八分二厘)

先重 9.43cm (9.9cm)

切先長 3.43cm

元重 9.59cm (9.46cm)

茎長 17.7cm (17.5cm)

茎反り わずか

切先長 3.43cm

元重 9.59cm (9.46cm)

茎長 17.7cm (17.5cm)

茎反り わずか

切先長 3.43cm

元重 9.59cm (9.46cm)

茎長 17.7cm (17.5cm)

茎反り わずか

切先長 3.43cm

元重 9.59cm (9.46cm)

茎長 17.7cm (17.5cm)

茎反り わずか

切先長 3.43cm

元重 9.59cm (9.46cm)

茎長 17.7cm (17.5cm)

茎反り わずか

切先長 3.43cm

元重 9.59cm (9.46cm)

備前住長船五郎左衛門尉清光

天文八年八月吉日(一五三九)

備前 天文

「備前国住長船五郎左衛門尉清光」

「備前国住長船五郎左衛門尉藤原清光」

永正の五郎左衛門尉清光の子とも

同人とも、ウ。

永祿までの作がある。

清光のなかでは一番の上り。

業切。

備前住長船五郎左衛門尉清光

天文八年八月吉日(一五三九)

備前 天文

「備前国住長船五郎左衛門尉清光」

「備前国住長船五郎左衛門尉藤原清光」

永正の五郎左衛門尉清光の子とも

同人とも、ウ。

永祿までの作がある。

清光のなかでは一番の上り。

業切。

備前住長船五郎左衛門尉清光

天文八年八月吉日(一五三九)

備前 天文

「備前国住長船五郎左衛門尉清光」

「備前国住長船五郎左衛門尉藤原清光」

永正の五郎左衛門尉清光の子とも

同人とも、ウ。

永祿までの作がある。

清光のなかでは一番の上り。

業切。

備前住長船五郎左衛門尉清光

天文八年八月吉日(一五三九)

備前住長船五郎左衛門尉清光

天文八年八月吉日(一五三九)

備前 天文

「備前国住長船五郎左衛門尉清光」

「備前国住長船五郎左衛門尉藤原清光」

永正の五郎左衛門尉清光の子とも

同人とも、ウ。

永祿までの作がある。

清光のなかでは一番の上り。

業切。

備前住長船五郎左衛門尉清光

天文八年八月吉日(一五三九)

備前 天文

「備前国住長船五郎左衛門尉清光」

「備前国住長船五郎左衛門尉藤原清光」

永正の五郎左衛門尉清光の子とも

同人とも、ウ。

永祿までの作がある。

清光のなかでは一番の上り。

業切。

備前住長船五郎左衛門尉清光

天文八年八月吉日(一五三九)

備前 天文

「備前国住長船五郎左衛門尉清光」

「備前国住長船五郎左衛門尉藤原清光」

永正の五郎左衛門尉清光の子とも

同人とも、ウ。

永祿までの作がある。

清光のなかでは一番の上り。

業切。

備前住長船五郎左衛門尉清光

天文八年八月吉日(一五三九)

備前住長船五郎左衛門尉清光

天文八年八月吉日(一五三九)

備前 天文

「備前国住長船五郎左衛門尉清光」

「備前国住長船五郎左衛門尉藤原清光」

永正の五郎左衛門尉清光の子とも

同人とも、ウ。

永祿までの作がある。

清光のなかでは一番の上り。

業切。

備前住長船五郎左衛門尉清光

天文八年八月吉日(一五三九)

備前 天文

「備前国住長船五郎左衛門尉清光」

「備前国住長船五郎左衛門尉藤原清光」

永正の五郎左衛門尉清光の子とも

同人とも、ウ。

永祿までの作がある。

清光のなかでは一番の上り。

業切。

備前住長船五郎左衛門尉清光

天文八年八月吉日(一五三九)

備前 天文

「備前国住長船五郎左衛門尉清光」

「備前国住長船五郎左衛門尉藤原清光」

永正の五郎左衛門尉清光の子とも

同人とも、ウ。

永祿までの作がある。

清光のなかでは一番の上り。

業切。

備前住長船五郎左衛門尉清光

天文八年八月吉日(一五三九)



大剣研究

刀 隆慶園出水住藤原正良作 (初代)

隆慶園 志保

「隆慶園山門院出水住藤原正良」

「隆州出水住正良」

上原十左衛門

入道して内連と号す。

鍛刀也。出水市武本八五三三番地。

始めは高田鍛冶に鍛刀の手ほどきをうけ、

その後波平安付(祝に安同)の門人となり、

さらに享保元年(一七二六)九田正房に入門

すると依えている。

宝暦十年(一七六〇)十月十三日没。

平成二十七年七月十七日

刃長 必之目(二尺一寸八分五厘)

元重 〇. 74 〇(〇. 71 〇)

茎尻中 二. 23 〇 茎先中 〇. 27 〇

錫造、庵棟尋常、錫巾は狭めて錫高は尋常、重ねは尋常で身中は広めの造込みとなり。

南の切先は中切先、反りは中向反りが浅くて先反りを加えた途々として刀姿となる。

地鉄は小坂目に板目でよく約升、地割が厚くついて細かな地景が交じる。地色は青黒く明るく透えて漆油の

ある見事な鉄。

刃文 先元は小油のよくなった小互の目、その先は境巾の広い互の目で油・匂が深く、互の目と互の目の向を

考れてつなく、刃中は湯足がよく入り、差表の物打下に湯の筋がかかる。庵慶としては上品な刃で匂口は明るく

冴える。

帽子は流れて先は小丸に押け、返りは長めに返る。

茎は生ぶ、錫巾・錫高は尋常で、刃力を強らせて舟底に近く、茎尻は入山形、刃角は日目棟(角小内)

錫節にかぶせて切る。健やかで地・刃の出来は素晴らしい。初・二代の

正良は現存品が少なく資料としても貴重な一振り。

鑑定刀

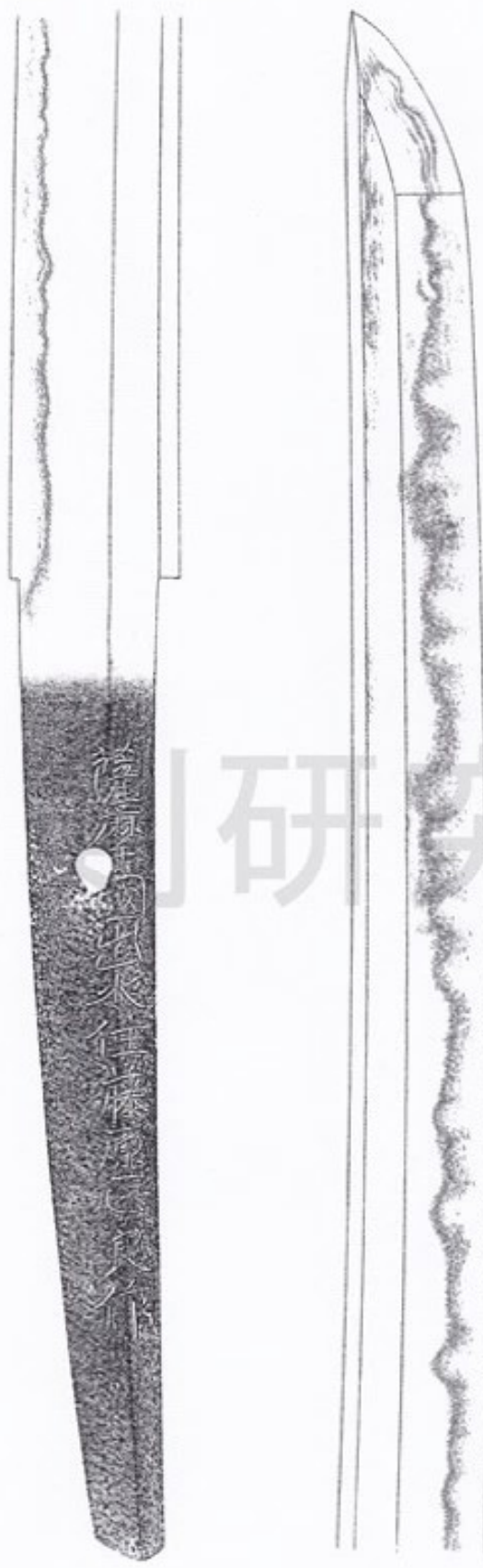
反り 〇. 1 〇(三分六厘)

先重 〇. 57 〇(〇. 54 〇)

切先長 3. 80 〇 茎長 〇. 24 〇(〇. 23 〇)

元中 3. 54 〇(3. 27 〇) 先中 2. 24 〇(2. 06 〇)

茎先重 〇. 40 〇(〇. 37 〇) 茎反り わずか



隆慶園 志保 出水住藤原正良作 (初代)

刀

研究

会

脇差 相州住廣友

明応

「廣友」「相州住廣友」

「相州住廣友」

市川氏。

長兵衛という。

明応、文龜、永正の作がある。

平成二十七年七月十七日 鑑定刀

刃長 5寸8分(一尺八寸三分二厘) 反り 1寸8分(四分五厘) 元中 3寸5分(3分6厘) 先中 2寸3分(2分9厘)

元重 0.6寸(0.5寸) 先重 0.4寸(0.3寸) 切先長 4.6寸 葉長 13.4寸(13.7寸) 葉反り 無し

茎元中 2.9寸 葉先中 1.6寸 葉元重 0.2寸(0.1寸) 葉先重 0.27寸(0.2寸)

鑄造、三ツ棟 棟筋の中は尋常で庵は高め、鑄中はやや広めで鑄は高め、重ねは薄めで身中の広い造込刀となり、切先は中切先が延びてフクラは花れる。反りは中間反りに先反りを加えて手元に踏張りをついた、葉の煙かい片手打の姿となる。

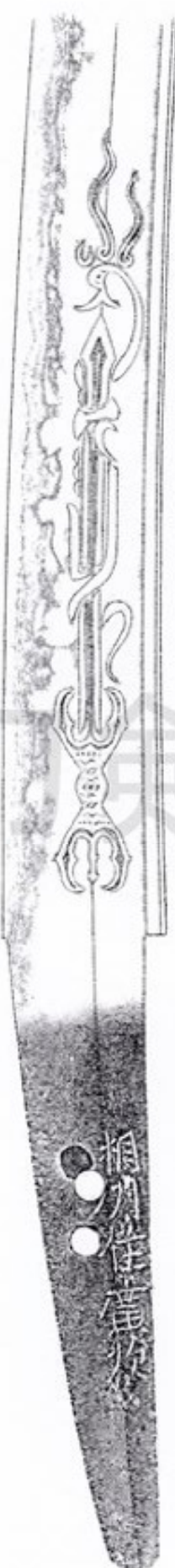
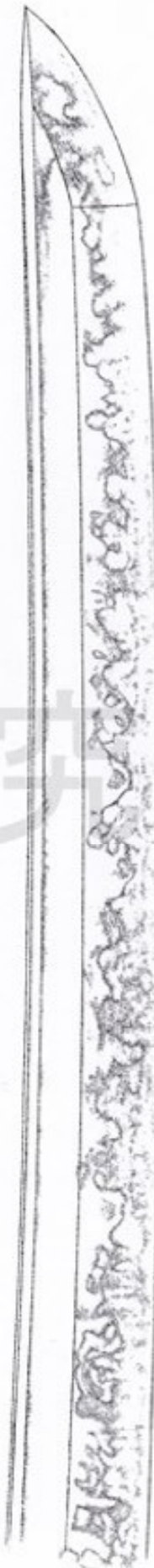
此鉄は小板目に板目を交じえてよく約オ、微塵の地沸が厚くつき細かな地景が肌にかけて沈む。透出し映りが濃く長われ、地色は黒味を帯びて潤いがわり明るく均える。

足と葉が激しく入り、金筋・砂流しを交じえ、匂口は明るく光の強い、小湯が厚くつく。 帽子は洗れて、先は尖りかげんに透る。

彫刻 長は草の俱利伽羅、表は梵字に護摩者。

刃 小丸り 棟 前小肉 鑄は勝ち下り、目釘元は二、上の元の上部分を鉛で埋める。

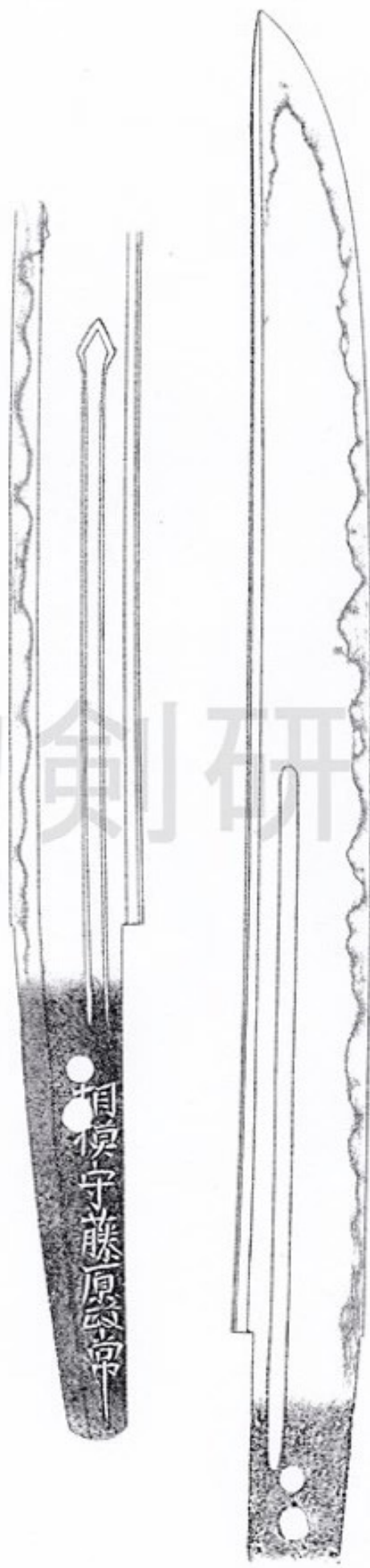
銘は鑄筋にかけながら錫地に長銘を切る。進力のある足、鍛之の古い地鉄に未相州物つ魅力が溢れている。



短刀 相模守藤原政常

尾張 慶長

相模守	政常	保羅守	氏房	伯耆守	信高	若狭守	氏房
生年	天文四年	生年	永祿十年	生年	永祿十年	生年	天正三年
受領	天正三年	受領	天正三年	受領	天正三年	受領	永祿十三年
	一五九二		一五九二		一五九二		一五七〇
	五十七歳		八十四		七十三		三十六
			二十五		二十九		五十六歳
			六十四		七十三		



平成二十七年七月十七日

鑑定刀

刃長 27.4cm (九寸八分六厘) 反り 0.3cm (四厘) 元中 2.43cm (二.40cm) 元重 0.32cm (0.31cm) 莖長 7.3cm (7.6cm)
 莖厚 0.3cm (0.30cm) 莖重 0.33cm (0.34cm) 莖先重 0.26cm (0.27cm)
 片切刃造、三ツ棟種初の中は狭く、腰は尋常、錫筋は低く、身中はやや広めの造りなり、フクラは枯れる。反りは中間反りが浅く、一寸迄は短刀の姿となる。
 地鉄は小板目に小歪と板目を交じえてやや肌立ち、細かな地沸が全面にわたって厚くつき肌は赤く、地景が表れる。よく鍛えられた強い鉄で明るく牙え、鉄色は青味がかる。
 刃文は肉度の急な小湾折に互の目で、両張りまたは丸味を帯び尖りかげ人の刃が交じり、表裏が揃いかげんとなる。刃中は長、足が入り所々刃先に抜け、細かな砂流しを交じえる。此れのは谷は小沸がよくつき、匂は締って明るく牙える。指子は湾折して先は尖りかげんに(三品風)此れで返る。
 彫刻 表は素剣、裏は長めの腰樋を掻き流す。
 莖は生ぶ、長寸で反りは無く錫筋は低く、元は栗尻、刃小丸口、棟角、鏡は勝手下り、目釘穴は二、強、地鉄、明るく牙えに反り刃は見事、莖は力強く健全。

刀剣研究